

YMCA News




「決意」

私は学生時代、盛岡YMCAと出会い、その後縁あって職員として8年間スタッフを勤めてきました。学生ボランティアリーダーとして、自分も子どものように無邪気に走り回っていたあの頃が懐かしい…。そんな私も今年で30歳です。そして今年、長年お世話になったYMCAからついに離れる決意をしました。正直、私は今複雑な気持ちに押し潰されそうです。

私はYMCAと出会えたおかげでたくさんの経験をさせていただき、人として大きく変化を遂げることが出来たと自信を持って言えます。それはYMCAを通して関わったすべての人のおかげです。決して楽しいことばかりではなく、子どもやリーダー、スタッフの一言に打ちのめされたことも数え切れないほどありました。いい歳の大人がどれだけ悔しくて悲しくて泣いたことか。

しかし、「次は頑張ろう！変りたい！」と立ち直らせてくれたのもたくさんの人の言葉でした。何よりも嬉しいのは、子どもか

らの信頼を感じた時。そして、何よりも楽しいのが、子どもと気持ち共有できた時。やりがいを感じ、この子たちに必要とされる居場所であり続けようと突き進んで来られました。私にとっても、盛岡YMCAはとても大切な居場所であることは間違いありません。

そして今、これまで私が伝えてきたことが、少しでも子どもたちの心の中に残ってしてくれたらいいなと願いながら、これからは少し離れた場所でみんなの成長を見守っていかようと思っています。長い間、たくさんの方々に支えていただいたことを心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

これからもYMCAでたくさんの人たちがつながりますように。



YMCA本町センター副センター長 家村知佳

盛岡 YMCA の使命

私たち、盛岡 YMCA は、イエス・キリストによって示された生き方に学びつつ、豊かな自然と歴史的伝統に満ちた岩手の地で、こども、家族、地域とともに公正で平和な世界の実現を目指します。

1. こどもたちの個性を大切にし、それぞれの夢や希望、生きる力を育みます。
2. 家族の絆といのちの大切さを深め合います。
3. 共に生きるために、異なった文化、多様な価値観と出会う場を提供します。



ピンクシャツデーの取り組み

ピンクシャツデーは2007年、カナダの学生2人から始まったいじめ反対運動です。ある日、ピンクのポロシャツを着て登校した少年が「ホモセクシャルだ」といじめられました。それを聞いた先輩2人が50枚のピンクシャツを購入し周りの学生たちに呼びかけました。

翌日学校では呼びかけに賛同した数百名の生徒がピンクのシャツや小物を身に着けて登校。学校中がピンク色に染まり、いじめが自然となくなったそうです。カナダで最初にこの出来事があった日が、2月の最終水曜日でした。それ以降、2月の最終水曜日に私たちもいじめについて考え、いじめられている人と連帯する思いを表す1日としています。

『他人事を自分事に』

皆さんの周りで悩んでる人、苦しんでいる人はいませんか？
もしいたら、私たちはその人のために何ができるでしょう？
考えること。行動を起こすこと。

今年度のピンクシャツデーは2月27日(水)です。一人でも多くの方にとって、考え、行動を起こすきっかけとなることを願い、盛岡YMCAは今年もピンクシャツデーに取り組みとして、以下のことを行いました。

① ピンクシャツデーに向け、趣旨に賛同しピンクの服や小物などを持ち撮影した写真をYMCAに送って頂きフェイスブックで発信。
(YMCAの各活動に参加している子どもたち、地域の企業・団体に向け協力をお願いを行いました。)

写真は社会人サッカークラブチーム成和FCのみなさんと毎週月曜日に開催している土淵サッカースクールの子どもたちになります。



↑<成和FCの皆さん>



↑<土淵サッカースクールのメンバー、学生ボランティアリーダー>

② 盛岡YMCAが実施する4つの学童保育での取り組み実施。
※2月27日のピンクシャツデーに向け、各校2月初旬～中旬にかけて取り組みをスタートしました。



←ぶらいむ・たいむ本町校の取り組み。有志で子どもたちからピンクシャツデー実行委員を募り、実行委員での話し合いの末、「いじめに対する想いを書き、ピンクの木に張っていく」という取り組みを行うことを決定し、学童に来た子どもたちが自分の想いを葉っぱの形の紙に書きはっていました。



↑ぶらいむ・たいむ前潟校の取り組み。友達の行いを見て良いことをしていると感じたら、その子の名前磁石(学童内出欠確認等のための磁石)にピンクのシールをはる。はられた子はそのシールを施設内にある白Tシャツの絵にはり、ピンクのシャツに染めていきました。

その他の各学童保育での取り組みは以下の通りです。

◇学童に参加した子どもに学童施設内で各いじめを受けている人に対し自分なら何ができるか考え、ピンクの紙に書き模造紙に貼っていく。

また、各家庭にも同じテーマで考えてもらい、ピンクの紙に書き提出してもらったものを模造紙に貼る。(向中野校)

◇子ども同士でいじめについて考える機会の設置。また、各家族でも考えてもらう様依頼。(盛南校)

◇学童に通う児童に向け地域の読み聞かせボランティアサークルによる絵本の読み聞かせの実施。(前潟校)

◇いじめに関する劇(子どもたちが演者)の開催。(本町校)

③ 特別企画 「今を楽しむには」の開催。

※スポーツを通して自然なコミュニケーションを取ることで、コミュニケーションの大切さ、喜びを体感する体験型講座。

④ その他

◇ピンクシャツデーを広く知ってもらうために、テレビ岩手「5きげんテレビ」に出演。

◇ピンクシャツデーを広く知ってもらうために、取り組みの取材を受けた。(前潟校の読み聞かせ:岩手日報社。ピンクシャツデー特別企画「今を楽しむには」:岩手日日新聞社、岩手日報社)

今回、上記でも紹介した学童保育ぶらいむ・たいむ本町校で行ったピンクの木にいじめへの想いを書くという取り組みの中で、1年生のA君が「一人をずっといじめていたらすけてあげないのかな?ぼーっとながめてみるのはだめだよ」と書いていました。

いじめに対して「自分事として」向き合い、「傍観者にならないこと」が困っていたり、悩み苦しんだりしている人を救う事につながると、私たちは考えています。

盛岡YMCAは、これからも誰かのために考え、行動を起こす事の大切さを伝え続けていきます。

この度趣旨に賛同し、共に行動を起こして下さった方々に心より感謝申し上げます。

ピンクシャツデー特別企画「今を楽しむには」



2月24日、岩手大学准教授の佐々木全先生を講師にお招きし、タグラグビーを通じた体験型講座を開催しました。開催の目的は、スポーツによる自然なコミュニケーションの中で人とコミュニケーションをとる楽しさ、大切さを知ってもらうということであり、当日は、高校生、学生ボランティアリーダー、ユース委員総勢27名が参加しました。

参加した高校生は、始めは表情に固さが見られましたが体を動かし、周りとコミュニケーションをとっていく中で少しずつほぐれていく様子が見られ、いつの間にか大きな声を出し、生き生きとした表情で走り回っていたのがとても印象的でした。タグラグビーでは、ボールを持っても思うように進めず、困ったり苦しくなる場面が常に生まれます。そんな時、チームメイトの声や動きがその助けとなり、それがチームのトライへとつながっていきます。

ピンクシャツデーを通して盛岡YMCAでは、困っている人、悩んでいる人に対し、傍観者にならず、その人のために考え、行動することの大切さを伝えたいと考えています。身近にその様な人がいた時、コミュニケーションは、その人の助けとなるうえでとても大きな意味と力を持ちます。

今回の企画が、コミュニケーションに対し前向きに捉えるきっかけとなれたら幸いです。また、その事が、身近で困っている人のために考え、行動を起こすことへとつながっていくことを願っています。

ユース委員会 担当職員 小川嘉文



2019.2.24 ピンクシャツデー 特別企画
「今を楽しむには」全体集合写真

農村青年塾参加報告



1月18日～20日、YMCA東山荘にて「第65回YMCA農村青年塾」が行われました。農村青年塾は全国から農業従事者や消費者、農業に興味がある一般の方が集まり、農業と歴史を学び、そして参加者が持ち寄った食材で野外調理をするといったプログラムを体験する事ができます。

私は昨年に引き続き2回目の参加となりましたが、前回は農業従事者の方々のパワーに圧倒されながらも、食材を提供している全ての人に感謝する「いただきます。」の意味を知ることができました。今回の参加で私は「食」を通して自然に触れ合う事の大切さを学ぶことを目的とし参加しました。

盛岡YMCA理事でもある農村青年塾 角谷晋次塾長の基調講演「三愛精神における隣人愛」では、古くは農民成人学校の時代から自然に触れ、土と共に生きる野外活動や、座談会の機会を多く設けることで他人の思想に触れる活動が多く行われていたことを知り、そしてデンマーク 牧場武井陽一先生と小久保秀樹氏による主題講演「大地に守られながら、福祉・酪農・医療に携わる」では、仲間と共に生活をし、農業を通じてひとりの人間として成長していくお話を拝聴しました。まさに現在の盛岡YMCAでのすべての活動で行われている、他人に触れ、他人を想うという事は改めて必要な事だと感じました。

2日目の野外調理「ブネウマ祭り」では、参加者が大事に育ててきた野菜や米、合鴨のお話を聞き感謝しながら食すことができました。



私が勤務している前潟センターでは畑を設け、子どもたちと野菜を育てています。今回の農村青年塾に参加し、「なぜ前潟校では畑プロジェクトをやっているのか。」という事を子どもたち・スタッフ全員でいまだ一度話し合い共通理解を得たいと思いました。

土という自然と触れることによって自分を認め、他人を受け入れ感情豊かに育つ、そんな「農業」を通じて成長していける畑プロジェクトでありたいと強く感じました。運営していただいた方、参加者の皆様に感謝いたします。

前潟センター 東森 聡

北東部ユース・リーダーズ・アクト2019



～2月2日、3日と、とちぎYMCA、栃木県体育館を会場に開催されました～

盛岡YMCAのリーダーとして活動始めてから約一年が経とうとしています。様々な活動に参加してきましたが、ここ最近、何のために活動に参加しているのかわからなくなっている自分がいました。活動に参加しても、ただ「参加しているだけ」の自分。周りの人は一回一回の活動の中で、いろいろなことを得て、たくさんのことを吸収しているのに、私は子どもたちと向き合っていることに精一杯でした。むしろ、子どもたちにちゃんと向き合えていたかもわかりません。そんな自分にモヤモヤしていました。そんな中、アグリーリーダーから「とちぎYMCAと一緒に行かない?」と個人的に連絡がきました。みんなリーダーが全体に連絡してくれた時から、何となく気になってはいたけれど怖くて手が出せずにいました。そのあと、アグリーリーダーからいろいろ話を聞いて純粋に「楽しそう!」と思ったし、今の自分を変えるきっかけになるかもしれないと思い、参加することに決めました。

1日目に行われたグループディスカッションで、今抱えている悩みを自分と同じグループだった人たちに打ち明けました。すると、リーダー歴5年の大ベテランのリーダーが「まずは、ほんとに小さなことでもいいから一回一回の活動毎に目標を立ててみるというよ!」とアドバイスをくれました。目標を立てることで、毎回目的をもって取り組むようになる。さらに、自分には何が足りていないのかも確認することが出来る。この積み重ねこそが、自分自身を少しずつ成長させることに繋がっていくのだと、アドバイスから感じる事が出来ました。

これからは、今までのようなぼんやりとした目標でなく、明確化した目標を立ててから活動に励みます。そして、活動を終えるたびに自己評価を行い、次に繋げていきます。

2日目のドッチボール大会のボランティア中、私は一人の男の子に感銘を受けました。ベンチでただ一人、大きな声を出し続け、コートにいるチームメイトを全力で応援していた男の子です。そのけげな姿に心を打たれ、「こういう子どもが増えればいいな。」と思ったことと同時に、この男の子のように影で頑張っている子どもを見守ってあげられるような人になろうと思いました。きっと、YMCAの活動にも参加してくれている子どもたちの中にもそういう子どもがいるはず。そういった子を見逃さない「鳥の目・虫の目・魚の目」の持ったリーダーになりたいです。

ここでは書ききれないくらい、栃木に行ってたくさんのことを感じる事が出来ました。関わってくださったリーダーやワイズメンズみなさんには本当に感謝しています。ありがとうございました。栃木に行って感じたこと、経験したことを今後のYMCAでの活動、さらに、自分自身の将来にも大いに生かしていく所存です。

これからも懸命に活動に励んでいきます。またみなさんと会える日を心待ちにしています。本当にありがとうございました!

盛岡大学1年 佐藤真菜(こだまりリーダー)

「0点!!」

皆さんは、テストで零点をとったことがありますか？僕は今まで2回あります。

一つは小学校に入学したての一番、最初のテスト。空を飛んでいるチョウチョの数だけ、チューリップを赤く塗りなさいという問題だった。絵が得意だった僕は、誰よりも丁寧にひとつも枠からはみ出さないようにすべてのチューリップを塗り上げた。ところが、翌日自身満々で受け取った答案用紙には大きく0点と書かれていた。

2回目は、高校2年生の2学期。このときはまるでちんぷんかんぷんで、とるべくしてとった零点だった。しかし、さすがに受け取った時のショックは大きく理系の進路を目指していた僕は、これをきっかけに文系に転じた。

先日「NHK高校講座物理基礎」という番組を見る機会があった。高校生の兄と妹の疑問に、物理好きなお父さんが答えていく構成だ。原子力エネルギーについて、原子の構造からわかりやすく解説していた。そして、番組の最後にお父さんはこんなことを語るのだ。

世界は 90 種類程の原子の組み合わせでできています。この原子は昔の星の中で生まれました。この原子が生まれる時のエネルギーで星は光っていたのです。つまり私たちは昔、かつて星として輝いていたのです。

宇宙から見れば私たちの人生はほんの一瞬です。でも、私たちはこの一瞬のうちにわずか 1, 4 リットルほどの脳の中で広大な宇宙の空間と時間を理解しようとしています。この脳が宇宙を再現しようとしているツールは物理学です。そんな見方のできる人生は楽しいと思いませんか？

僕たち人間の体も原子の組み合わせでできている。それは、生命の誕生以前の地球の誕生まで遡るらしい。壮大なイメージを持ち、テストの点数にビクビクしないで勉強できたらどんなに楽しいことだろう。

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた、神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。

旧約聖書 創世記1章1節~3節

盛岡YMCA 総主事 濱塚有史

みなさんはきっと、「おもてなし」という言葉に馴染みがあると思いますが、外国人の私はなかなか馴染む事ができなかった。

相手に喜んでもらうため、心を尽くして気持ちよく過ごすため、相手に気を遣う。相手に不愉快な思いをさせないよう、人は常々気を遣い、良い関係を保ちながら感情を深めていくもの、と考えたとき「おもてなし」=「気遣い」と捉えても良いのか、という疑問を抱いた。

人への気遣いをあまり意識しなかった自分も、いつの頃からか日本人みたいに周囲に気を遣い始め、普段何気ない日常でも、行動を起こす前に周りの人の目線や、相手にするべき配慮が何なのかとても気になってしまう。その結果、気を遣わなくて済むはずのところにも、気を遣ってしまう。

その後、よく考えてみた。相手を一人の人間として尊重し、お互いに気持ちよく生活するために気を遣うのは実に素晴らしいことだが、相手への配慮が過剰になって気を遣い過ぎると、その場にいる人にとっては「この人、気を遣い過ぎなんじゃない?」「そこまでしなくていいのに...」「一体どういう意図なの?」等々逆効果となり、捉えようによっては間接的に迷惑をかける事になるのかもしれない。

また、おもてなしの一つの意味として、表裏なしで人を接するということがあるが、気を遣い過ぎると自分も相手も、心の中に生じた表裏で不愉快になるのではないかな。

そうなったときにもまだ、「おもてなし」=「気遣い」と言えるのでしょうか？

(日本の日常生活:お気に入り冬の景色)



表紙の写真から



ピンクシャツデー 特別企画 「今を楽しむには」に参加してくれたリーダーたち。この日は、午前中スキーキャンプ報告会に出席してから参加。YMCA運動の最前線で活躍する若者たちです。



最新情報はこちらでチェックできます！「盛岡YMCA」で検索ください。

ホームページ : <https://www.moriokaymca.org/>

facebook : <https://ja-jp.facebook.com/moriokaymca/>

感謝

(2019年度2月25日現在) 敬称略

●維持会員

熊谷大樹、工藤直子、今松桂子、熊谷太、吉崎陽、水田賢次、大関靖二、阿部深雪、光永尚生、濱塚秋二、濱塚れい子、増田隆、名古屋恒彦、名古屋理恵、植田一茂、二戸真文、高橋友恵、熊谷力貴、尾形裕一郎、伊藤信彦、田村治之、川坂保宏、澤田優美、北田仁則、北田アユ子、古澤伸、武田理恵子、鶴丹谷三千代、高橋廉翔、人見晃弘、菊地弘生、重石桂司、高瀬稔彦、千田沙里、工藤悦子、家村知佳、滝川佐波子、小笠原邦夫、遠藤昌樹、清水治彦、上中優奈、今野聖子、今野健男、林辰也、森山日菜乃、森山幹大、佐藤隼人、工藤あさひ、工藤誠太、佐藤洋一、中島敬泰、小野寺大介、魚住恵、神田橋慧一、山口貴伸、濱塚有史、濱塚真美、高橋奈菜、押切梓、齋藤之彦、南原良哉、小林茂元、伊藤眞一、伊藤まどり、小川嘉文、小川明佑、伊藤眞太郎、伊藤愛美、松尾聡子、中原眞澄、日語教会、島田茂、佐藤翔、中村圭一、小山憲彦、角谷晋次、水野暢夫、澤田鉄平、井上浩太郎、井上優子、井上修三、宮崎幸雄、浅沼慧、浅沼美希、大塚英彦、晴山浩輔、尾張幸久、小守林靖一、東森聡、武田理恵子、魚住英昭、秋永光里、杉田深雪、相馬みなみ、釜ヶ澤亮、武田悠、深澤英雄、深澤多紀子

●寄附金

今松桂子、熊谷大樹、光永尚生、濱塚秋二、濱塚れい子、増田隆、高橋友恵、熊谷力貴、伊藤信彦、中原眞澄、角谷晋次、潮田祐、晴山浩輔、斎藤優太、藤原祐三、尾張幸久、小守林靖一、武田理恵子